OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

香川大学看護学雑誌　第13巻第１号，101-107，2009

〔報告〕

断酒会入会者を対象とした調査（その３）
―婚姻および断酒会の有用性―

片岡睦子[1]，杉山敏宏[2]，谷岡哲也[3]，片山秀史[4]，吉田精次[5]，橋本文子[6]，大森美津子[7]

[1]独立行政法人国立病院機構善通寺病院附属善通寺看護学校
[2]足利短期大学看護科
[3]徳島大学医学部保健学科
[4]医療法人第一病院
[5]医療法人あいざと会　藍里病院
[6]徳島文理大学保健福祉学部看護学科
[7]香川大学医学部看護学科

Relationship between Alcohol Abstinence and Marital Status in Members of "Danshu-kai" (Japan Sobriety Association), PartⅢ : Usefulness of "Danshu-kai" and Marriage

Mutsuko Kataoka[1], Toshihiro Sugiyama[2], Tetsuya Tanioka[3], Hideshi Katayama[4]
Seiji Yoshida[5], Fumiko Hashimoto[6], Mitsuko Omori[7]

[1]*Zentsuji Nursing School, National Hospital Organization Zentsuji National Hospital*
[2]*Department of Nursing, Ashikaga Junior College*
[3]*Department of Health Sciences, The University of Tokushima*
[4]*Daiichi Hospital*
[5]*Aizato Hospital*
[6]*The Faculty of Health and Welfare, Tokushima Bunri University*
[7]*School of Nursing, Faculty of Medicine, Kagawa University*

要　旨

断酒会に所属する会員に対し，断酒会入会から現在の飲酒・断酒に関する行動について，婚姻による影響を明らかにすることを目的に分析した．断酒会会員294人を調査対象とし，質問紙および留置き法で行った結果，回収率は56.8%（167名：男性150名，女性17名）であった．調査対象者の平均年齢は58.6±11.1（mean±SD）（男性59.7±10.5，女性48±11.7）歳であった．既婚率は81.4%（136名），未婚率は15.6%（26名），未記入率3.0%（５名）であった．調査内容は，１）婚姻状況に加えて，２）婚姻状況，断酒会への参加状況，断酒会の有用性などに関する11の質問項目，３）アルコール問題による家庭問題などに関する２つの質問項目，合計14の質問項目であった．断酒会入会から現在の断酒に至るまでの過程について婚姻の有無による影響があるかどうかについて比較した．その結果，アルコール問題により家庭を破壊した後に家庭を修復した経験（χ^2＝12.29，P＝0.0005）以外は，有意差はみられなかった．婚姻の有無に関わらず，断酒会への満足度は高く，断酒継続に強い影響を及ぼしていることが推察された．

キーワード：アルコール依存症，断酒例会，自助グループ，婚姻

連絡先：〒765-0001　独立行政法人国立病院機構善通寺病院附属善通寺看護学校　善通寺市仙遊町２－１－１　片岡睦子
Reprint requests to: Mutsuko Kataoka, RN; BSN, MA Zentsuji Nursing School, National Hospital Organization Zentsuji National Hospital, Zentsujisi Senyutyo　2－1－1
shuji 2 @zkangaku.hosp.go.jp

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

Summary

The purpose of this research is to clarify influence of the marriage about the family situation by alcohol-related problems, and participating situation to the self-help group for alcoholics “Danshu-kai”（Japan Sobriety Association, JSA）for total abstinence etc. A mail survey and/or a placement method survey on alcohol dependency were conducted in two prefectures. Participants were 294 patients who are affiliated with JSA and had been treated for alcoholism. The response rate was 56.8%（150 males, 17 females）. Subjects’ average age was58.6±11.1（mean ±SD）years（male, 59.7±10.5；female, 48±11.7 years）. The average of the first alcoholic experience of them was at the age of 18.4±6.3. Twenty eight men（18.6%）and five women（29.4%）started drinking at the age of less than 15 years old. Average duration of drinking was 25.4±11. 3 years（male, 26.4；female, 16.5 years）, and average abstinence periods were 10.1±9.5 years（male, 10.6；female, 4.5 years）. A married rate was 81.4%（n=136）, unmarried rate was 15.6%（n=26）, and unanswered rate was 3.0%（n=5）. The questionnaire is composed of 14 items that 1）marital status, 2）11 question items about the participating situation to the JSA, and the usefulness of the JSA, etc. , 3）2 question items about the family situation by alcohol-related problems. Statistically significant difference was obtained in experience which recover from a dysfunctional family in the married group（$\chi^2=12.29$, $p=0.0005$）. However, there was no statistical difference in the other items in both groups. These results suggest that 1）participants very satisfied with the JSA regardless of the marriage status, 2）JSA had done positively impact on continuation of total abstinence.

Keywords：Alcohol addiction, “Danshu-kai”（Japan Sobriety Association）, Marital status

はじめに

アルコールは，上手に付き合うことさえできれば，生活の潤滑油となり，健康増進につながり，明日への活力とエネルギー源にも利用できる[1]．しかしながら，我が国の飲酒人口は，年々増加傾向にあり，約6500万人と推定され，そのうち236万人が大量飲酒者（その飲酒量は，日本酒に換算し約５合半）されている[2,3]．

アルコールは，身体依存及び精神依存を引き起こす精神作用物質であり，飲酒の仕方をあやまった場合には，仕事や家庭における深刻な問題を引き起こす[4]．アルコール依存症は，進行性，致死性の疾患であるが，適切な治療によって回復する．しかしながら，治療に結びつけることが難しい．本人も，周囲も，酒の問題からは目をそらしがちとなり，現実を冷静に検討すれば，飲酒問題は明らかなのに，それを認めない．もしくは飲酒問題は認めても，自力で対処できると強弁し，病気とは認めない．それゆえ，アルコール依存症は「否認の病気」と考えられている．否認はアルコール依存症からの回復にとってもっとも重要な問題である．

アルコール依存症者が断酒を継続するための社会復帰プログラムとして断酒会やAA（Alcoholics Anonymous）のセルフヘルプ・グループ活動が高い評価を得ている[5]．断酒継続には，共通の課題や問題を志向する仲間と出会い，継続的な相互作用を蓄積する過程が有効であり，これは「分かち合い・ひとりだち・ときはなち」[6]と呼ばれるセルフヘルプ・グループの機能である．また断酒の継続には患者だけでなく家族の存在も大きく，家族や支援者がいることが断酒率に大きく影響している．このことから断酒をしていくためには家族ないしは支援者の存在が必要不可欠である[7,8]．

アルコール依存症患者の家族を対象とした研究では，家族に入院させられたと感じている一部の人達には家族教室が効果を示さない例もみられ，家族システムの変容効果を調査の焦点をあてた報告[9]はあるが，家族の中でも配偶者に焦点を当てた研究は見当たらない．

したがって，断酒会に所属する既婚者にとって配偶者の存在は断酒継続関係があるのか，飲酒による家庭崩壊の状況を明らかにすることは，今後断酒会入会者およびその家族への支援に活かすことができるため，その意義は大きい．そこで本研究では，筆者ら[10]が先に報告した調査結果を基に，断酒会入会者の断酒と婚姻との関係を明らかにする．

目的

本調査では，断酒会に所属する会員に対して，断酒における断酒会の有用性と飲酒による家庭問題についての状況を婚姻の有無別に比較し，その関係を明らかにする．

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

調査方法

１．調査対象者：A県中央部のａ断酒会，ｂ断酒会，B県東部に位置するｃ断酒会，同じくB県北部山間部のｄ断酒会に所属する断酒会会員294人を調査対象とし，そのうち回答のあった167名を対象とした．

２．属性：167名のうち男性150名，女性17名であった．平均年齢は58.6±11.1（mean±SD）（男性59.7±10.5，女性48±11.7）歳であった．飲酒歴は平均25.4±11.3年（男性26.4年，女性16.5年）であった．断酒期間は10年１か月±９年６か月(男性10年７か月,女性４年６か月）であった．既婚者は136名（81.4%),未婚者は26名（15.6%),未記入者５名（3.0%）であった．

３．調査方法：調査用紙は，事前に各断酒会長の許可を得た上で，郵送もしくは断酒会役員に直接手渡して配布した．

４．調査内容：調査項目は，１）婚姻状況に加えて，２）断酒会への参加状況，断酒会の有用性などに関する項目として，①断酒会入会のきっかけ，②断酒例会への出席状況，③断酒会の満足状況，④断酒会への出席が生活に及ぼす影響，⑤断酒会への出席で断酒できるか，⑥断酒会への出席で友人ができたか，⑦断酒会でできた友人は心の支えか，⑧断酒会での体験が飲酒の歯止めになっているか，⑨自分にとって断酒会はどのような存在か，⑩断酒会に出たくない気持ちの有無，⑪最初から断酒会に参加しやすかったか，３）アルコール問題による家庭問題などに関する項目として，⑫アルコール問題により家庭を崩壊した経験，⑬家庭を修復した経験の合計13項目について婚姻別に分析した．

５．調査期間：2005年６月中旬から2005年８月末であった．

６．分析方法：各調査項目について，クロス集計を行いフィッシャーの正確確率検定を行った.有意水準は，５％以下とした．分析に用いた統計ソフトはSPSS11.0Jであった．

７．倫理的配慮：断酒会場に足を運び，断酒会会員に研究の意義と目的，および個人が特定されないように十分にプライバシーには配慮することや，研究以外には調査結果を用いない旨説明した．郵送での返送をもって同意が得られたものとした．

結果

断酒会入会のきっかけについては，既婚者で，断酒会入会は自分の意思と回答した人は50人（42.7%),他人からの勧めと回答した人は67人（57.3%),未婚者はいずれも11人（50.0%）で，婚姻の有無による有意差はみられなかった（表１－a）

断酒例会への出席状況については，既婚者で，断酒会に毎月参加していると回答した人は96人（80.7%),時々・気が向いたときだけ・調子が悪いときと回答した人は23人（19.3%）であった．未婚者で断酒会に毎月参加していると回答した人は21人（80.8%),時々・気が向いたときだけ・調子が悪い時と回答した人は５人（19.2%）で，婚姻の有無による有意差はみられなかった（表１－b).

断酒会の満足状況については，既婚者で満足している・やや満足していると回答した人は85人（70.9%),普通と回答した人は29人（24.2%),やや不満・不満と回答した人は６人（5.0%）であった．未婚者で，断酒会に満足している・やや満足していると回答した人は18人（72.0%),普通と回答した人は６人（24.0%),やや不満・不満と回答した人は１人（4.0%),婚姻の有無による有意差はみられなかった（表１－c).

断酒会への出席が生活に及ぼす影響については，既婚者で断酒会が生活にかなり影響していると回答した人は84人（70.6%),あまり関係ない・どちらともいえないと回答した人は35人（29.5%）であった．未婚者で断酒会が生活にかなり影響していると回答した人は20人（76.9%),あまり関係ない・どちらともいえないと回答した人は６人（23.1%）で，婚姻の有無による有意差はみられなかった（表１－d).

断酒会への出席で断酒ができるかどうかについては，既婚者で出席により断酒ができると回答した人は116人（95.1%),断酒できないと回答した人は６人（4.9%),未婚者で断酒ができると回答した人は25人（96.2%),断酒できないと回答した人は１人（3.8%）で，婚姻の有無による有意差はみられなかった（表１－e).

断酒会への出席で友人ができたかどうかについては，既婚者で断酒会の出席により友人ができたと回答した人は112人(94.1%),できないと回答した人は７人(5.9%),未婚者で，友人ができたと回答した人は25人（96.2%),できないと回答した人は１人（3.8%）で婚姻の有無による有意差はみられなかった（表１－f).

断酒会でできた友人は心の支えかどうかについては，既婚者では断酒会で出来た友人は心の支えと回答した人は107人（95.5%),心の支えでないと回答した人は５人（4.5%）であった．未婚者で心の支えと回答したのは23人(92.0%),支えでないと回答したのは２人(8.0%)であり，婚姻の有無による有意差はみられなかった（表１－g).

断酒会での体験談は飲酒の歯止めになっているかどう

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

かについては，既婚者で断酒会での体験談が飲酒の歯止めになっていると回答した人は108人（92.3%),歯止めにならないと回答した人は９人（7.7%),未婚者で歯止めになっていると回答した人は24人（92.3%),歯止めにならないと回答した人は２人（7.7%）であった．結婚の有無による有意差はみられなかった（表１－h).

断酒会は自分にとってどのような存在かについては，既婚者で断酒会が貴重な存在と回答した人は105人（86.1%),あまり関係ない・どちらともいえない17人（14.0%),未婚者で断酒会が貴重な存在と回答した人は23人（88.5%),あまり関係ない・どちらともいえないと回答した人は３人（11.5%）であった．婚姻の有無による有意差はみられなかった（表１－i).

出来ることなら断酒会には出たくないについては，既婚者で，断酒会に出たくない思うことが全然ないと回答した人は43人（38.4%),時々ある・仕方なく参加・どちらともいえないと回答した人は69人（61.74%）であった．未婚者で断酒会に出たくない思うことが全然ないと回答した人は８人（30.8%),時々ある・仕方なく参加・どちらともいえないと回答した人は18人（69.2%）であった．婚姻の有無による有意差はみられなかった（表１－j).

断酒会に最初から参加しやすかったかどうかについては，既婚者で最初から参加しやすかったと回答した人は61人（51.7%),参加しやすくなかったと回答した人は57人（48.3%),未婚者で参加しやすかったと回答した人は14人（56.0%),参加しやすくなかったと回答した人は11人（44.0%）であった．婚姻の有無による有意差はみられなかった（表１－k).

アルコール問題により，家庭を崩壊した経験（家族のメンバーがバラバラになった，もしくは，離婚の危機に立たされた）があるかどうかについては，既婚者で経験があると回答した人は74人（64.3%),経験がないと回答した人は41人（35.7%),未婚者で経験があると回答した人は16人（61.5%),経験がないと回答した人は10人（38.5%）であった．婚姻の有無による有意差はみられなかった（表１－l).

アルコール問題により家庭を崩壊（家族成員がバラバラになった，もしくは離婚の危機に立たされた）した後に家庭が修復（断酒によって家族関係が修復され，家族が一緒に生活できるようになった）したかどうかについては，既婚者で修復したと回答した人は63人（90.0%),修復しなかったと回答した人は７人（10%),未婚者では，修復したと回答した人は５人（50.0%),修復しなかったと回答した人は５人（50.0%）であった．既婚者で家庭を崩壊した後に家庭を修復したと回答した人が有意に多かった（$\chi^2=12.29$，$p=0.0005$）（表１－m).

考察

断酒会入会から現在の断酒に至るまでの過程について，婚姻が影響しているかどうかについて分析した結果，アルコール問題により家庭を崩壊した後に家庭を修復した経験以外には，有意な差はみられなかった．

既婚断酒会員の70.9%，未婚断酒会員の72%が断酒会に満足しており，既婚断酒会員の95.5%，未婚断酒会員の92%が断酒会でできた友人が心の支えであると答えている．また既婚断酒会員・未婚断酒会員ともに92.3%が断酒会での体験談が飲酒の歯止めになっていた．すなわち会員の婚姻の有無にかかわらず断酒会に満足し，心の支えとなる友人ができ，また飲酒の歯止めになっていることが推察された．

断酒会が断酒会入会者に断酒を継続させる要因として断酒会のセルフヘルプ・グループとしての機能そのものが考えられる．断酒会はセルフヘルプ・グループであり共通の問題を抱えている当事者が相互援助を目的として，基本的には当事者自身が作った自主的な活動を行うグループである．調査対象となった断酒会は，断酒会でなければ断酒は無理であるという立場をとっており，縦組織の形を取り，断酒会会長（又は理事長),副会長（同，副理事長）の下に酒害者が集結し，その中で断酒を継続しつつ頑張っていく形態である．この例会に参加することにより，自分と同じ問題を抱える人たちがいることを知り，自分だけではないと思い，配偶者や親・兄弟でも言えない事もグループ内では本音で語り合うことができるようになる．このような機能を果たすグループ活動について，如澤ら[11]がグループメンバーやスタッフとの関わりを通して，他者に関心を持ち，自分自身についての理解を深め，相互に作用し変化成長すると述べている

断酒会入会のきっかけについては，既婚の断酒会員では「他人からの勧め」と回答した人が「自分自身の意思」より少し上回っており，未婚者の回答は同等であった．しかし，断酒会への出席状況は「毎月参加している」と回答した人はいずれも約８割,満足度については「満足」「やや満足」と回答した人が，約７割であった．このように，断酒会にある程度満足していることが推察された．断酒会の出席が生活に及ぼす影響については，婚姻の有無に関わらず，約７割の人が「かなり影響している」と回答しており，ほとんどの人が「断酒できる」と回答している．岡田[12]のアルコール依存者の長期断酒体験についての研究によると，異常な飲酒によって自分を見失い，周囲の人との関係も崩壊し，「孤独」「絶望」に至るま

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

表１　婚姻状況と断酒との関係

質問項目						χ	p
a. 断酒会入会のきっかけ			自分の意志 n(%)	他人の勧め n(%)			
	n＝139	既　婚	50(42.7)	67(57.3)		0.40	0.53
		未　婚	11(50.0)	11(50.0)			
b. 断酒例会への出席状況			毎　月 n(%)	時々･気が向いた時･調子が悪い時 n(%)			
	n＝145	既　婚	96(80.7)	23(19.3)		0.00013	0.99
		未　婚	21(80.8)	5(19.2)			
c. 断酒会の満足状況			満足･やや満足 n(%)	普　通 n(%)	やや満足･不満 n(%)		
	n＝145	既　婚	85(70.9)	29(24.2)	6(5.0)	0.047	0.98
		未　婚	18(72.0)	6(24.0)	1(4.0)		
d. 断酒会への出席が生活に及ぼす影響			かなり影響 n(%)	あまり関係ない･どちらもといえない n(%)			
	n＝145	既　婚	84(70.6)	35(29.5)		0.05	0.82
		未　婚	20(76.9)	6(23.1)			
e. 断酒会への出席で断酒できるか			断酒できる n(%)	断酒できない n(%)			
	n＝148	既　婚	116(95.1)	64(4.9)		0.05	0.82
		未　婚	25(96.2)	1(3.8)			
f. 断酒会への出席で友人ができたか			できた n(%)	できない n(%)			
	n＝145	既　婚	112(94.1)	7(5.9)		0.17	0.68
		未　婚	25(96.2)	1(3.8)			
g. 断酒会でできた友人は心の支えか			支え n(%)	支えでない n(%)			
	n＝137	既　婚	107(95.5)	5(4.5)		0.53	0.47
		未　婚	23(92.0)	2(8.0)			
h. 断酒会での体験が飲酒の歯止めになっているか			なっている n(%)	なっていない n(%)			
	n＝137	既　婚	108(92.3)	9(7.7)		0.00	1.00
		未　婚	24(92.3)	2(7.7)			
i. 自分にとって断酒会はどのような存在か			貴重な存在 n(%)	関係ない･どちらともいえない n(%)			
	n＝148	既　婚	108(92.3)	17(14.0)		0.11	0.75
		未　婚	24(92.3)	3(11.5)			
j. 断酒会に出たくない気持ちの有無			なし n(%)	時々ある･仕方なく参加･どちらともえいない n(%)			
	n＝138	既　婚	43(38.4)	69(61.7)		0.53	0.47
		未　婚	8(30.8)	18(69.2)			
k. 最初から断酒会に参加しやすかったか			はい n(%)	いいえ n(%)			
	n＝143	既　婚	61(51.7)	57(48.3)		0.15	0.70
		未　婚	14(56.0)	11(44.0)			
l. アルコール問題により家庭崩壊した経験			あり n(%)	なし n(%)			
	n＝141	既　婚	74(64.3)	41(35.7)		0.07	0.79
		未　婚	16(61.5)	10(38.5)			
m. 家庭を修復した経験			あり n(%)	なし n(%)			
	n＝82	既　婚	63(90.0)	7(10.0)		12.29	0.0005
		未　婚	6(50.0)	6(50.0)			

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

で追い詰められた状況下で，断酒会や仲間，信頼のおける医療従事者の存在に出会ったとき，「救われた」「生きる場所をみつけた」といった希望を見出していくことができる．そして「仲間のため」「先生のため」に断酒の決意をすると述べている．したがって，断酒例会への出席により心の支えとなる友人ができたこと，そして会のなかで話される体験談をもとに自己洞察することが飲酒の歯止めの一つの要因になっていると考える．

断酒会のとらえ方については，断酒会の存在について，「自分にとって貴重な存在」と回答した人は約９割であった．そのことから断酒会が心のよりどころとなっていることが伺われる．しかし，「最初から参加しやすかった」と回答した人は約５割，「断酒会に出たくないと思うことが時々ある」と回答した人は約５割，アルコール問題より，「家庭を崩壊した経験がある」と回答した人は約６割であった．

アルコール依存症者の飲酒動機はさまざまであるが，連続飲酒などが原因で人間関係を崩しながら，人間関係を閉ざして社会的に孤立していく．このような悪循環の結果たどり着いたのが病院である．アルコール依存症治療のために紹介された断酒会で，自分と同じ問題を抱える友達がいることを知り，次第に自分の失敗談や罪悪感などを表出できるようになる．他の会員が受け止めてくれたとき，自分を肯定的に受け止められるようになる．また他の会員に自分の体験を伝えることで自己理解が深まる．これらの機能が働くには，自己開示できること，会員が悩み・気持ち・体験を十分に話し，会員同士で共有することが必要である[13]．

ここからは，断酒と婚姻との関係について考察したい．

今回の被調査者の８割は既婚者であり平均断酒期間は10年以上の長期間にわたる．大草ら[14]はアルコール依存症入院患者の退院後の動向調査を行い離婚が治療の途中放棄に関係していると考えられたと指摘している．このことから，被調査者が10年以上も断酒している背景には婚姻が影響を及ぼしていることが推察される．

アルコール問題により家庭崩壊後，家庭修復したかどうかについては，既婚者で家庭を修復したと回答した人が有意に多かった．調査対象者の平均年齢58.6±11.1歳から考えると飲酒開始年齢からアルコール依存症に移行するまでに，長期の飲酒期間を要している可能性がある．断酒会に入会し，長期に断酒を継続できる人は離婚の危機が過去にあったとしてもそれを何とか免れてきた人たちと推察される．

断酒会は家族の凝集性を強化することで酒害を克服しようとする家族療法の側面を持っている．家族療法としての断酒会の特徴は，悪循環を生む対称的関係が優位する家族システムを，良循環を生む凝集性の高いシステムに変換する点にあるといえる[9]．

大野[15]の断酒会既婚者の意識変容に関する研究によると，断酒会は断酒継続を支えはしても，その断酒継続がアルコール依存症の派生的症状ともいえる夫婦関係の悪化からの回復には関連しない．しかし，夫婦問題への否認という第２の否認（飲酒の背後にある諸問題の否認）を解くと，断酒継続とともに夫婦関係を回復する可能性があるとされている．婚姻状態であっても，言い争うことが多く，家庭内で何週間も口をきかない状態の形ばかりの夫婦関係であれば，断酒継続に悪影響がある．つまり，夫婦関係が良好か否かが断酒継続に影響を及ぼす．今回家庭修復の過程についてまでは調査していないため，詳細を明確にできないが，夫婦関係の回復には断酒に加え，夫婦関係について意識を向ける関わりが必要と考える．また，家族が受けた酒害からのトラウマにどのように関わるかも重要である．

しかし，本研究の限界性は，断酒会入会後に退会する者が定着するものよりも圧倒的に多いという現状からすれば，断酒会の退会者を含めたものでないことである．今後は，この点を考慮に入れて調査を進めていきたい．

おわりに

断酒会入会から現在の断酒に至るまでの過程について婚姻の有無による影響があるかどうかについて調査した．断酒会員の９割以上の者が断酒会に満足しており断酒会で友人ができ心の支えとなり，また断酒会での体験談が飲酒の歯止めになっていると考えられた．被調査者の８割は既婚者であり平均断酒期間は10年以上の長期間にわたる．このことから，婚姻が断酒に影響を及ぼしていることが推察された．

アルコール問題により家庭崩壊後に家庭修復したかどうかについては，既婚者で家庭崩壊後に家庭を修復したと回答した人が有意に多かった．アルコール依存症に至るまでには，飲酒開始年齢からアルコール依存症に移行するまでには，長期の飲酒期間を要し，また年齢的にも既婚している年齢に達している可能性がある．断酒会に入会し，長期に断酒を継続できる人は離婚の危機が過去にあったとしてもそれを何とか免れてきた人たちと推察された．

今後さらに，家庭修復にいたる要因を調査し，夫婦関係について意識を向ける関わりや，家族が受けた酒害によるトラウマに対する関わりの一助としたい．

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

謝辞

本研究にあたり，ご協力いただきました各断酒会員の皆様，ならびに関係者の皆様に深く感謝いたします．

文献

1）斉藤学：アルコール依存症に関する12章，自立へステップ・バイ・ステップ，４-５，有斐閣新書，2004.
2）白川教人，長尾博司：依存症・溺れる心の不思，28－29，河出書房新社，1999.
3）精神保健福祉研究会監修：我が国の精神保健福祉，精神保健福祉ハンドブック，133-135，太陽美術，2003.
4）杉田知己，鈴木康夫，鈴木節夫：回復アルコール依存症者の実態調査静岡県断酒会員へのアンケートから，アルコール研究と薬物依存，20(３)，250-262，1985.
5）岡本隆寛：アルコール・リハビリテーション・プログラム参加者の入院期間中の意識変化－アンケートによる追跡調査より－，順天堂医療短期大学紀要，13，21-30，2002.
6）田所溢丕：自助グループとの関係を今一度考える・断酒会と医療機関，日本アルコール関連問題学会誌，(５)，114-115，2003.
7）中柴満里，保苅啓子，森千鶴：アルコール依存症患者の自宅退院を受け入れる家族の心理変化とその要因－妻と母親を比較して－，第36回精神看護，160，2005.
8）市川奈緒美，園山純代，小泉素子：アルコール依存症で入院中の夫を持つ妻の思い，第36回精神看護，99-100，2005.
9）松岡知恵子，若林義雄，乾富士男：アルコール依存症への systems　approach，定期的な外泊による家族システムの変容，日本精神科看護学会誌，45(１)，291-294，2002.
10）杉山敏宏，谷岡哲也，上野修一：断酒会会員の断酒に至る過程に関する実態調査，The Journal of Nursing Investigation，6(２)，83-88，2007
11）如澤学，増子友美：アルコールデイケアを開始して－３事例から知る集団凝集性－，日本精神科看護学会誌，45(２)，351，2002.
12）岡田ゆみ：長期断酒体験で築かれた断酒への意識，日本看護研究学会雑誌，29(２)，74，2006.
13）宮崎和子：看護観察のキーポイントシリーズ精神科Ⅰ，263-266，中央法規，2005.
14）大草英文，佐藤民枝：アルコール依存症者のグループ治療に関する統計調査，日本精神科看護学会誌，45(２)，356-359，2002.
15）大野佳枝：断酒会既婚者の意識変容に関する実証的研究，アディクションと家族，20(１)，72，66-74，2003.